

## 前口上

今回（第2号）のテーマは、前回（第1号）のテーマ（「教養とは」）に引き続いて、またもや「FDとは」です。——またもや、と申し上げましたのは、このような大学にとっては当然の、あたりまえのテーマ（theme=前提命題）を、ことさら大学の発行する冊子が主題に掲げ、特集を組み、これを論じなくてはならない、昨今の大学の奇妙な、ありていに言えば、病的な症状を顧（かえり=省）みでの発言ですが、どうやら大学も20世紀の「世紀末」以来、声高に「教養」を叫ばないと「教養」は大学から姿を消し、もっぱら「FD」を奨励しないと、大学の教員は教育活動に熱を入れず、授業改善には取り組まない時代が到来しているかのようです。とは言っても、そのような時代は例えば、アダム・スミスが『国富論』（第5編第1章第3節）の中で述べているように、すでに18世紀のイギリスのオックスフォード大学においてすら、常態と化していた事態では、ありえたのですが。

ともかく、そのような時代の荒波の中で、この冊子の発行に今回も漕ぎ着けることが叶いましたのは、幸甚と申し上げなくてはなりませんし、そのために前回と同様、それぞれの学部（faculty）の発展（development）のために、昼夜を分かたずに尽力をしていらっしゃる皆さんが、その多忙を縫い、多様な成果を持ち寄っていただけましたことは、有り難い、の一言に尽きます。そのような感謝の意味を込めて、また、これから当センター（「教養の森」）の「オランウータン」（orangutan=森の人）の仲間入りをしてくださるであろう、幾人かの皆さんに対して、この場には場違いな、唐木順三の言葉（「近代日本の思想文化」）を次に引き、そもそも大学において「教養」や、ひいては「教養教育」が、どのような「文化」としての位置や役割を有するものであるのかを、遺憾ながら……新漢字と新仮名遣いに改め、句読点等も加えながら、読み易く、掲載しておくことに致します。

文化（カルチュア）とは、もともとは教養（カルチュア）と同じく、物を栽培し、育成すること、種子のうちに潜む能力を育てる（カルティヴェート）ことを意味した。有機体のなかに可能性としてある、個性の開花という意味のカルチュアは、一方において西欧的な意味での主体的な教養、自己形成を意味するとともに、その有機体の置かれた土地、環境との適応としての教育、躰けを意味するだろう。（中略）従って教養にしても文化にしても、我々の生き方、くらし方、考え方、作り方、雰囲気、制度、伝統と密着した概念といわなければならない。いや、むしろ、（中略）それを概念として定義づけようとしても、定義づけえないような、強いて客観的に定義づければ、大切なものが洩れてしまうような、時代の空気の如きもの、具体的な現象の背後にひそんで、自ら、その姿を充分には顕わしえないが、現象にはすべて、その息がかかっている、という性質のものといってよい。